

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(出題の都合上、本文の一部を変えています)

見事な畳表を作り上げる技を持ったおせいは息子喜八とともに仕事に励んでいたが、夫亡き後、死ぬまでに自分の織った畳表がどのように使われているかを見届けなくなった。そこで伊三次(髪結い職人)・喜八とともに、ある武家屋敷の座敷の畳表の補修に同行することとなった。

「ここだ」

喜八はひと気のない座敷の前に来た時にそう言った。廊下を隔てて中庭が見える小さな座敷だった。小さいと言っても八畳間である。開け放した座敷には陽の光が弱々しく射し込んでいた。さほど調度品のないあつさりとした座敷だった。畳の縁は白地に紋織りが入った、いかにも御正室にふさわしい上品なものだった。喜八はおせいと伊三次をそこに残して廊下を進んで行った。

「おつ母ア、これがおつ母アの拵えた表か？」

伊三次が訊くとおせいはこっくり肯いた。

「本当にそうか？」

「伊三ちゃん、なんぼ老碌しても自分が拵えたもんは、わかる……」

「そうか……」

おせいはそのまま黙って畳に視線を落としていた。伊三次はそんなおせいの横顔をじっと見ていた。満ち足りたようなその顔を伊三次は美しいと感じていた。

喜八が戻って来たので名残惜しいようなおせいを急かして表庭に戻ろうとした時だった。

「待ちや！」

甲走った鋭い声が廊下に響いた。伊三次はぎょっと振り向いた。いつの間にか廊下の曲がり角の所に着物の裾を引いた女が立って、じっとこちらを見ていた。年若い中臈だった。(中略)伊三次の脇の下を冷たい汗が流れた。後頭部が針の束を突き立てられたようにチクチク疼いた。

「何者じゃ？」

中臈は小意地の悪い表情で訊いた。三人は廊下を下りて中庭の土の上に膝を突いた。

「畳屋でございませう」

喜八は深々と頭を下げて言った。

「それはわかっている。そのおなごはどうしたのじゃ？ このような所まで入り込むとは怪しき振る舞い。場合によっては許しませぬぞ」

無人のように思えた屋敷内から女達がぞろぞろと出て来た。縹色の揃いの着物に紫編子の帯をやの字太鼓に結んでいる女達は目の前の中臈よりも身分の低い者なのだろうと伊三次は思った。なぜかそこに侍の姿はなかった。

「お局さまを……」

中臈は傍らに控えていた女に小声で囁いた。

その声はこだまのように次々と伝わった。

伊三次と喜八は顔を見合わせ、ゴクリと唾を飲み込んだ。おせいの顔は紙のように白かった。そのお局さまの現れるまでの時間の何んと長かったことだろう。

「何事じゃ、騒々しい」

お局さまと呼ばれた女はやはり襦袢の裾を引き摺って現れたが、最初に声を掛けた中臈よりはるかに年上に見えた。長局の責任者であるらしい。鶴のように痩せた身体からは威厳のようなものが感じられた。伊三次の動悸はさらに激しくなった。

「曲者にございませう」

中臈は廊下に膝を突いてお局さまに言った。

「はて、畳屋ではないか。本日、長局の間の畳入れ替えは前々より申し送りがあったはず。曲者などと穏やかでないことを申すでない」

「お言葉ではございませうが、そのおなご、瘦せた方の男はお方さまのお化粧の間を何やらじっと眺めておりました」

「……………」

お局さまは伊三次達をじっと見つめ、やがて「仔細を申してみよ」と低い声で言った。喜八はもう口を利けなかった。伊三次は顔を上げてお局さまの眼を見た。柔和なその眼は嘘も真実もたちどころに見抜くようにも思われた。観念するしかなかった。

「ここにいる人は、そっちの畳職人の母親とおせいと申します。わたしは付き添いで参りました髪結いの伊三次って者です。おせいさんは化粧の間の畳表を拵えました。冥土の土産に自分の拵えた畳の部屋をその目で見たいと是非で願ったものですから……ご無礼は重々承知で拝見させていただきました。申し訳ございません。どうぞ、平にご勘弁を」

伊三次はそれだけ言うのがやっとだった。

中臈はそれ見たかと言わんばかりに勝ち誇った表情で「無礼者め！」と甲高い声を上げた。お局さまはその中臈を目線で制し「まことか？」と訊ねた。

「へい」

「そなたではない。おせいとやらに訊ねておるのじゃ」

おせいは黙って頭を下げるばかりだった。

「そなた、江戸者か？」

「おつ母アは、いえ、おせいさんは備後の出です」と伊三次は代わって応えた。

「よう口の回る髪結いじゃ。おせい、そなたの畳表は国では何んと呼ばれておる？」

試しているような言い方だった。

「備後表でござえませう」

おせいはそれだけ蚊の鳴くような声で応えた。

「そうか……わらわも備後の出じゃ。故あって酒井様のお屋敷に奉公しておる。そなたの畳はお方さまもいたくお気に入りじゃ。寸分のたわみもなく丈夫で、しかも見事に美しい。そうか……そなたが織った畳表か……存分に眺めたか？」

おせいが何度も頭を下げるのを横目に見ながら伊三次は胸が熱くなっていた。むさくるしい年寄りにそのようなねぎらいの言葉を掛けるお局さまは、やはり人の上に立つほどの器量を備えているのだと伊三次は感心した。

「おせい、これからもやよ、励め。ささ、このような所にいつまでもいてはならぬ。早う、去ね」

お局さまはそう言うって踵を返した。何も、何事も咎めはなかった。

伊三次とおせいは後片付けのある喜八達を残して屋敷を出た。外に出るとおせいの気はいつきに弛み、地面にぱつたりと転んだ。不破は慌てておせいの腕を取った。

「わたいの表がありましたのや。それはそれは美しい畳になってのう、ありがたいことや、ほんにありがたい……」

興奮がおせいを途端に饒舌にしていた。不破はそうかそうかと相槌を打った。しかし、おせいはそこから一歩も歩けなかった。伊三次が背負って行こうと思った時、不破がおせいの前に背中を見せてしゃがんだ。

「おれが背負って行こう」

「旦那！」

伊三次は慌てて不破を制した。

「いいんだ。おせい、お前エは伊三次の母親代わりだったそうだな。どれ一つ、おれにも親孝行の真似をさせろ」

不破はそう言った。おせいはひどくためらっていたが不破の再三の申し出にようやく身体を預けた。不破はおせいを枯れ木の束のように軽々と背負った。

おせいは背負われながら顔を閉じていた。

その閉じた顔から一筋流れるものを伊三次は見た。

陽は燦々と頭上にあつた。打ち水もとうに乾いた埃っぽい道を歩きながら、伊三次はつかの間、菊の香を嗅いだ。

それがこの秋の伊三次の大きな事件だった。

(この「事件」の後、おせいと喜八は助けてくれた伊三次のために、畳表を造ってくれた。) 切り炬の上に納まった。喜八が寸法を取りに来ていたので間違うはずもないのだが。

そうして見ると古い畳とおせいの畳の違いはなおさらよくわかった。詰んだ目、美しい光沢、清々しい匂い……いなみはいつまでもその畳を撫でていた。そこにおせいがいるとお局さまは思った。

おせいはそれから一年後に死んだ。喜八の子供に産湯を使わせ、お君の産後の世話を果たし、さらに表を二十畳も拵えてからおせいは逝った。自分の表を酒井家の奥で見たことが唯一の誇りだと死ぬまで言っていたそうだが。

いつもは忙しさに紛れて暮らしている伊三次だったが、菊の咲く頃、決まっておせいを思い出した。それは少年の頃の少し寂しくて切ない思い出も伴った。菊は葉も茎も立ち枯れでも、なお花の部分だけは鮮やかに形を保つ辛抱強い花だ。そんな菊はまるでおせいのようだと伊三次は思う。しかし、伊三次の感傷など構ったことではないというように毎年、菊は咲く。来年も再来年も……恐らく人の世の続く限り――

【注】

- 1 畳表たたみわて＝畳の表面にとりつける薄い藁わら草の織物
- 2 調度品てうどひん＝身の回りの道具類
- 3 紋織りもんぢり＝模様を浮かして織った布地
- 4 御正室ごせいしつ＝大名の本妻。正妻
- 5 老碌らうろく＝年を取って思考力・記憶力などがひどく悪くなること
- 6 甲走かみはしつた＝甲高い
- 7 中臈ちゆうらう＝大名の屋敷に仕えた女官
- 8 縹色はんだいろ＝うすいあい色
- 9 縹子しよす＝サテン。つやがあつてなめらかな感じの織物
- 10 お局おぢよさま＝女官を取りしきる、局(個室)を与えられていた女性
- 11 裯うちかひ＝上着

- 12 長局ながつばね＝女官たちの部屋がたくさんある長い建物
- 13 仔細しじゆ＝詳しい事情
- 14 平ひらに＝なにとぞ
- 15 備後びんご＝現在の広島県東部
- 16 踵かかとを返した＝引き返した
- 17 不破ふわ＝伊三次いさんじの雇い主
- 18 饑舌うへぢ＝口数が多くなること
- 19 炉ろ＝茶室に敷く小さな畳。「炉」とは畳の一部を四角く切り取って掘り下げ、火をおこせるようにしてあるところ
- 20 切り炉きりろ＝19の「炉」と同じ
- 21 いなみ＝不破ふわの妻
- 22 お君おきみ＝喜八きぱちの妻

問一 ― 線部①「満ち足りたようなその顔を伊三次は美しいと感じていた」とあるが、それはなぜか、次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア おせいの拵こしらえた畳表が、中庭からの陽の光に映はえて御正室の姿のように美しく輝かがやいていることに、おせい自身が魅みせられていて感じたから
- イ おせいの拵こしらえた畳表が、あつさりした座敷の品の良さを際き立たせて御正室に似合にあっていることに、おせい自身が誇ほりを抱いだっていると感じたから
- ウ おせいの拵こしらえた畳表が、あつさりした座敷を御正室にふさわしい華はなやかなものになっていることに、おせい自身が魅みせられていて感じたから
- エ おせいの拵こしらえた畳表が、ひと気のない小さく静かな八畳間はつじやうかんを豪華ごうかなものに見せていることに、おせい自身が誇ほりを抱いだっていると感じたから

問二 ― 線部②「観念するしかなかった」とあるが、どういうことか、解答欄に従って、六十字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問三 ― 線部③「試ためしているような言い方だった」とあるが、なぜそのような「言い方」をしたのか、解答欄に従って、三十五字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問四 ― 線部④「何も、何事も咎とがめはなかった」とあるが、それはなぜか、次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア おせいが無断で屋敷に入り込んだのは腹立はらだたしいが、お局さまには、おせいが畳表造りに熱意を注いで会得えとくした洗練された技量を尊重し、考慮りよする優雅えいさが備そなわっていたから
- イ おせいが無断で屋敷に入り込んだのは腹立はらだたしいが、お局さまには、同郷のおせいが苦勞して畳表造りの技量を培つちかったことを理解し、同情する深い思いやりが備そなわっていたから
- ウ おせいが無断で屋敷に入り込んだのは咎とがめるべきことだが、お局さまには、おせいが培つちかってきたすぐれた技量と畳表にける熱意を理解し、考慮りよする懐ふところの深さが備そなわっていたから
- エ おせいが無断で屋敷に入り込んだのは咎とがめるべきことだが、お局さまには、同郷のおせいが上品な備後表びんごに惹ひかれるのを我わがごとくのように実感する親身みせみな思いが備そなわっていたから

問五 ― 線部⑤「その閉じた臉まはたから一筋流れるものを伊三次は見た」とあるが、この時のおせいの気持ちを六十字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問六 ― 線部⑥「そんな菊きくはまるでおせいのようだ」とあるが、どういうことか、次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア おせいは、年老おとしいて姿形は衰おとろえたけれども、畳表造りにかける熱く誇ほり高い心意気と、磨ひきあげられた技わざをたもち続けていたということ
- イ おせいは、年老おとしいて姿形は衰おとろえたけれども、元氣なころの潔いさぎよくはつらつとした姿を思い描えがけるほどのはなやかさを持もっていたということ
- ウ おせいは、年老おとしいて姿形は衰おとろえたけれども、その仕草しきさうや装まいに一つの技わざを極きめた者の氣品きひんが漂たい、全く年齢れいを感じさせなかったということ
- エ おせいは、年老おとしいて姿形は衰おとろえたけれども、内面は年齢れいを重ねることに深められ、その精神的な氣高きたかさに近寄りがたさを覚おぼえたということ

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

誰もが持っている。無限に大きなものを公平平等にさずかっている。しかし、たいていは忘れ、気がつかず、目もくれない。頭上の空、あの天空。陽が射し、雨が落ちてきて、雲の流れるところ。生まれたときからあったし、死ぬときも、むろん天にひろがっている。とりわけ親しいはずなのに、とんと疎遠のままに過ごしてしまふ。

かつては大切な情報源だった。日射しや雲行きで天気を読みとった。むかしの船乗りたちは精魂こめて空をにらんだ。読みまちがえると、いのちにかかわってくる。大切な行事や向きをかえた人は、のべつ空を見上げて一喜一憂したものだ。遠足や運動会の前日、幼い者たちには雲の動きが気がでなかった。ハナたらしでも、どのような雲が不吉な使者であるか、おぼろげながら知っていた。それなりに空から情報を受け取るすべをこころえていた。

気象庁がとって代わって、もはや誰も頭上を見上げない。予報になかったのに、突然の雨にみまわれたときなど、なぜか気象庁ではなく空を悪者にして舌打ちする。

「空はなぜあのように青いのか。また空はなぜそのように赤くなるのか。そして空は、美しい虹や蜃気楼の舞台であるが、こういうものも一つとして同じものがない」

『空の色と光の図鑑』は超高層物理学専攻の老キョウジュの文と、四十年代ナカバの高校の教師が撮りだめた写真とで出来ている。読みやすくて、写真がまた息を呑むほどすばらしい。指さして知らせるように、頭上にひろがる「大きな忘れもの」を教えてください。

気象学では夜明け前の薄明を三つに区分しているらしい。ひとつめは「天文薄明」といって、日の出前、約九十分ごろからにあたる。天体観測が終了して、空は少しずつ明るくなりかけているが、返りはまだまっ暗。

ふたつめを「航海薄明」といって、日の出前約六十分ごろからのこと。まだ空の色は薄くて青白い。航海者が明るい星と水平線とを見定めて船位をきめたところから、この名がついた。みつめは「市民薄明」。日の出前約三十分からで、すでに屋外で照明なしに仕事ができる明るさ。うまいメイメイだろう。駅の階段に早朝出勤の人の足音がひびき出す。黙々と、わき目もふらずホームへ向かうものだが、たまに東の空に気をつけてみるといい。

赤、だいたい、黄色の光の層が大きくなっていく。上空は緑がかった深いブルー。地球の壮大なライトアップであって、そのスケールと色彩の豊かさは、どんな観光イベントよりもすばらしい。早朝出勤組への宇宙からのプレゼントと考えていいのである。

日本列島で、いちばん日の出が早いのはどこか？ 地球は自転しているから、地形的に東の端がいちばん早い——とばかり思っていたが、そうではなかった。季節だけでなく、経度や緯度、海面からの高さといった条件があり、冬ともなると、房総半島の清澄山、海拔三七七メートルのこの山頂の日の出が関東近辺ではいちばん早い。

その清澄山は、日蓮上人が「南無妙法蓮華経」の第一声をトナえたところとして知られている。僧日蓮は早くから厳しい廻国修行をした人であって、地理にくわしかった。とりわけ日の出の早い地点を選びとったのは、そんな宗教者の本能にちがいない。

蜃気楼、虹、「光芒」とよばれる放射状の光のすじ、稲妻、オーロラ……。空はまったく千変万化する舞台だが、その舞台をつくっているのは、わずかに空気と水蒸気と太陽の光だけ。つくづく自然の造形力の偉大さを思い知らずにはられない。

虹のヴァリアントにあたるが、「白虹日を貫く」という。白い虹が太陽を刺すかたちでかかっている。中国の故事にはじまり、古来、兵乱の前兆として恐れられてきた。この図鑑には随所に読み物の頁がはさまってあって、それがまた楽しい。一九三六年(昭和十一年)二月、東京地方に吹雪がみまい、とりわけ寒い朝だった。井伏鱒二の『萩窪風土記』に出てくるようだ。

「空は青く晴れ、皇居の上に出ている太陽を白い虹が横に突き貫いているのが見えた」

井伏鱒二はきつと「白虹日を貫く」を知っていたのだろう。不吉な思いがしたものか、立ちどまって観察したらしく、それが細い虹で、「太陽の直径の三分の二くらいの幅」といったことまで書きとめている。日付は二月二十五日。二・二六事件の前日であって、まさしく故事を実証した。

科学的にいうと白虹は、ふつう虹といわれているものではなく、空気中の氷の結晶が起こす現象である。太陽の左右に白く輝くオビジヨウの環ができるのを「幻日環」というが、それと同じ原理のもの。

そのほか「火の玉」「セント・エルモの火」「プロッケンの妖怪」「狐火」などのこと。大気はとんでもない仕掛けのスペクタクルをやってくれる。

なまじっか科学的知識を仕入れると、せっかくの不思議さが色あせるだろうか？むしろ逆である。大空劇場に入るための入場券といったところだ。秋が深まり冬が近づくと、なおのことスターが登場してくる。夜空の色と光のスカイ・ショウが楽しめる。

【注】 (池内紀「空」(「本は友だち」より)

- 1 超高層物理学Ⅱ地上約五十キロメートル以上の高い空間で起きる現象を研究する学問
- 2 日蓮上人Ⅱ鎌倉時代の仏教の僧
- 3 廻国修行Ⅱ諸国を修行して回る
- 4 ヴァリアントⅡ変形。変種
- 5 井伏鱒二Ⅱ小説家
- 6 二・二六事件Ⅱ軍部による反乱
- 7 「火の玉」Ⅱセント・エルモの火Ⅱ「プロッケンの妖怪」Ⅱ「狐火」Ⅱ自然現象につけられた名前
- 8 スペクタクルⅡ壮大・豪華な場面

問一 線部 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 線部 A～D について、文中での意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|-------------|---------|---------|-----------|-----------|
| A 「とんと」 | ア 意外と | イ むしろ | ウ まったく | エ しばらく |
| B 「のべつ」 | ア 無意識に | イ 真剣に | ウ 気づいたときに | エ ひっきりなしに |
| C 「おぼろげながら」 | ア ぼんやりと | イ はっきりと | ウ しっかりと | エ じんわりと |
| D 「すべ」 | ア 方法 | イ 作法 | ウ 常識 | エ 前提 |

問三 線部①「大きな忘れもの」とあるが、何を「忘れ」てしまったということか、解答欄に従って、二十字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問四 線部②「市民薄明」とあるが、「市民」と名付けられたのはなぜか、次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 市民の暮らしの音が響く頃の明るさであるから
- イ 市民が互いの顔を認識できる明るさであるから
- ウ 市民の大半が仕事に向かう明るさであるから
- エ 市民が社会活動を始められる明るさであるから

問五 線部③「つくづく自然の造形力の偉大さを思い知らずにいられない」とあるが、ここで言う「自然の造形力」とはどのような力か、解答欄に従って四十字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問六 線部④「まさしく故事を実証した」とあるが、どういうことか、解答欄に従って、五十字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問七 線部⑤「大空劇場に入るための入場券」とあるが、どういうことか、解答欄に従って、四十字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問八 本文で用いられている「一喜一憂」「千変万化」のように数字を含んだ四字熟語について、次の①～⑤の意味に従って後の□の中から適当な語を選び、正しく漢字に直して答えなさい。

- ① 他を顧みず、一生懸命そのことをすること
- ② ひとつの事を行って同時に二つの利益を得ること
- ③ 強く待ち焦がれる思い
- ④ きつぱり物事の処置をつけること
- ⑤ 一目で見渡すこと

いつきよりようとく いちいせんしん
いつとうりようだん いちじつせんしゅう
いちぼうせんり

三 次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。1～14は行の番号を表しています。

まだ知らない友

1 本当に手を取りあふこと

2 さらけ出しあふこと

3 苦しみ合ふことは楽しみだ

4 ①これが美の極だ

5 私の詩を愛する人人は

6 私どもに近い悩みを悩む人でなければ

7 苦しみを汲みわけてくれる人人だ

8 私のゆく道は万人のこない道だけれど

9 ②自分によく似た宿命を負った人の来る道だ

10 耐へ忍んだ悲しみに

11 ③いつも満眼の心持を

12 あふれ輝やかす人人だ

13 ④その魂こそわたしの友を呼ぶ声に答へる

14 やさしい慰めをもたらし来てくれる

(室生犀星「室生犀星詩集」より)

【注】

1 汲み分け(る) 〓それぞれの事情を思いやる

2 満眼 〓涙や喜びの表情などが目に満ちること

問一 この詩を三つの部分に分けた場合に、次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。(1～14は行の番号を表している)

- | | | | |
|---|---------|--------------------|--------------------|
| ア | 1 2 3 4 | 5 6 7 8 9 10 11 12 | 13 14 |
| イ | 1 2 3 4 | 5 6 7 8 9 | 10 11 12 13 14 |
| ウ | 1 2 | 3 4 5 6 7 8 9 | 10 11 12 13 14 |
| エ | 1 2 | 3 4 5 6 7 | 8 9 10 11 12 13 14 |

問二 線部①「これが美の極だ」とあるが、筆者はどのような関係を極限的に美しいと考えているのか、解答欄に従って五十文字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

問三 線部②「自分によく似た宿命を負った人」とあるが、どういう人か、次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 詩人である自分と同様に、世の中を繊細な感覚でみつめ、それをことばで美しく表現することに何よりも大きな喜びを感じる人
- イ 詩人である自分と同様に、自身の内面とことん向き合い、他者と苦しみや悲しみでもって深くつながることを信条とする人
- ウ 詩人である自分と同様に、他者の苦しみや悩みを共有し、何とかそれを互いにことばで解決しようと試行錯誤をくりかえす人
- エ 詩人である自分と同様に、世の中のすべてを美の対象としてとらえ、人の苦悩すらも祈りへと高めていく深い精神性を持つ人

問四 線部③「その魂こそわたしの友を呼ぶ声に答へる／やさしい慰めをもたらし来てくれる」とあるが、どういうことか、次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 詩人が自らの内面から湧き上がることばに苦しめられていることに、同じように苦しむ読者の存在が、詩人にとっても救いであるということ
- イ 詩人が借り物ではないことばを生み出そうと苦しんでいることに、そのことばを待望する読者の存在が、詩人にとっても救いであるということ
- ウ 詩人が個人的な苦しみをことばにする行為に、自分の思いをことばにしてくれたと感謝する読者の存在が、詩人にとっても救いであるということ
- エ 詩人が自らの苦しみから紡ぎだしたことばに、自らの苦しみによる共感や理解を寄せてくれる読者の存在が、詩人にとっても救いであるということ

問五 題名「まだ知らない友」とあるが、「まだ知らない」という表現には詩人のどのような思いが込められているか、四十文字以内で答えなさい。(記号・句読点も一字とする)

受験番号

一

問一

Answer box for Question 1

問二

Answer grid for Question 2

問三

Answer grid for Question 3

から

問四

Answer box for Question 4

問五

Answer grid for Question 5

問六

Answer box for Question 6

二

問一

Answer grid for Question 1 (Section 2)

えた
e

問二

Answer grid for Question 2 (Section 2)

A

B

C

D

a

b

ば
c

d

問三

Answer grid for Question 3 (Section 2)

とうとうと

問四

Answer box for Question 4 (Section 2)

問五

Answer grid for Question 5 (Section 2)

力

問六

Answer grid for Question 6 (Section 2)

とうとうと

問七

Answer grid for Question 7 (Section 2)

とうとうと

問八

Answer grid for Question 8 (Section 2)

①

②

③

④

⑤

三

問一

Answer box for Question 1 (Section 3)

問二

Answer grid for Question 2 (Section 3)

関係

問三

Answer box for Question 3 (Section 3)

問四

Answer box for Question 4 (Section 3)

問五

Answer grid for Question 5 (Section 3)